

「宇治拾遺物語」の仏法説話

高 橋 貢

一、 静観僧正が大岩を折り砕いた話

大比叡の西北に大岩があつて龍が口をあけた様子に似ていた。そのためか西塔に住む僧は大勢死んだ。人々は「毒龍の岩」と名づけた。静観僧正は岩に向かつて七日七夜加持すると、七日目の夜中に空が曇り、大地が震動し、大比叡の峰に黒雲がかかつて見えなくなつた。夜明けにみると、岩はこまごまに飛び散つていた。その後人々には何の祟りもなかつた。

(今は昔、静観僧正は、西塔の千手院といふ所に住み給へり。その所は、南に向ひて、大嶽をまもる所にて有りけり。大嶽の成亥の方のそひに、おほきなる巖あり。その岩の有りさま、龍のくちをあきたるに似たりけり。その岩のすぢにむかひて住みける僧共、命もろくして多く死にけり。しばらくは、いかにして死ぬるやらんと、心もえざりける程に、「此のいはのある故ぞ」といひたちにけり。此のいはを、毒龍の巖とぞ名づけたりける。これによりて、西塔のありさま、ただあれにのみあれまさりけり。此の千手院にも、人多く死にければ、住みわづらひけり。このいはは

を見るに、誠に龍の大口を明きたるに似たり。人のいふ事はげにもさありけりと、僧正思ひ給ひて、この岩のかたに向ひて、七日七夜加持し給ひければ、七日と云ふ夜半ばかりに、空くもり、震動する事おびたし。大嶽に黒雲懸りて見えず。しばらくありて、空晴れぬ。夜明け、大嶽を見れば、毒龍巖くだけて散りうせにけり。それより後、西塔に人住みけれども、たたりなかりけり。

西塔の僧どもは、件の座主をぞ、いまにいたる迄、貴みおがみけるとぞ語りつたへたる。不思議の事也。)

右は「宇治拾遺物語」(以下「宇治」と略称)第二十一(流布本卷二第三)「同じき(静観)僧生大嶽の岩折り失ふ事」の話を要旨と本文である。

この話は元来「日本往生極楽記」(以下「極楽記」)第六にあつて、静観の法力をたたえる話としてとり上げる。「宇治」でも題から明らかなように、撰者は岩を折り砕いた静観の法力を主題としてこの話をとり上げたのであろう。ところが「宇治」のこの話をみる

と静観の法力と関係ない岩の怪奇性や人々がたたりで死ぬ有様をこまごまと書いてあるが、それはなぜであろうか。この話で静観が実際に登場して活躍する場面は最初の一行の「静観僧正は、西塔の千手院といふ所に住み給へり。」と、最後の「僧正思ひ給ひて、この岩のかたに向ひて、七日七夜加持し給ひければ、」だけで、他はむしろ岩のたたりと怪奇性を書くことに主がある。話の語り手や撰者もこの点に興味があつたように思う。

この話は元来「極楽記」にある。この話は静観が生まれてから往生するまでの行業を記したものである。

延暦寺座主増命は、左大史桑内安峯が子なり。父母児なし。祈りて和尚を生めり。和尚天性慈仁にて、少くして児の戯なかりき。夢に梵僧ありて、来りて摩頂して曰く汝菩提心を退くことなかれといへり。かくのごときこと数なり。受戒の後にいまだ曾より臥し寝らざりき。智証大師に就きて三部の大法を受けたり。和尚尊卑を分たず、客来ることあれば、これを迎へ送りぬ。

(1~3)

叡岳の嶺の上に透める巖舌のごとくして、西塔に相向ふ。智徳の僧多くもて天亡せり。古老の曰く、巖の妖なりといへり。和尚これを聞いて、巖を望みて歎息し、三日祈念せり。一朝に雷電して巖悉く破れ砕けぬ。その殞れたる片石は今に路の傍にあり。(4)

太上法皇、師となして廻心戒を受けたまへり。戒壇の上に紫金の光を現す。見る者随喜せり。もし宿病ある者は、和尚の鉢の飯を食するに、その苦患するところ痊愈せずといふことなかり

き。和尚俄に微き病ありて、一室を洒掃して、門弟子に告げて曰く、人と生れて限あり。本尊我を導きたまふ。汝等近く居るべからずといへり。今夜金光忽ちに照し、紫雲自らに聳けり。音楽空に遍く、香氣室に満てり。和尚西方を禮拜して、阿弥陀仏を念ず。香を焼きて、凡に倚りて、眠れるごとくして氣止めぬ。斂葬の間に煙の中に芳氣あり。天子使を遣して勞問したまふ。諡を静観と賜へり。(5~7)

この話の要点を簡条書き(右の本文中の(1~7)にする)左のようになる。

1、静観の出自。2、幼児の時の逸話。3、智証大師に師事。4、巖を祈り砕く。5、太上法皇、師とする。6、奇瑞。7、往生。七項目のうち「宇治」第二十一と特に関連があるのは4である。「極楽記」は1から7にかけて全般的に静観の奇瑞、験力、往生を書き留めることに主眼点がある。4の場合も例外ではない。静観の験力以外の巖の怪奇性やたたりを記述している部分は「宇治」と比べると極めて簡単で、「叡岳の嶺の上に透める巖舌のごとくして、西塔に相向ふ。智徳の僧多くもて天亡せり。古老の曰く、巖の妖なりといへり。」とあるだけである。「宇治」の場合は、岩の怪奇の様相、周囲の人々の評判と動搖、を簡潔ではあるが記している。特に岩のたたりという評判が立つて動搖し、西塔が荒廢して行く箇所「此のいはを、毒龍の巖とぞ名づけたりける。これによりて、西塔のありさま、ただあれのみあれまきりけり。此の千手院にも、人多く死にければ、住みわづらひけり。このいははを見るに、誠に龍の大口を明きたるに似たり。」、及び静観の加持によつて岩が砕け

「散る怪奇の様相を記した箇所」「七日と云ふ夜半ばかりに、空くもり、震動する事おびたし。大蔵に黒雲懸りて見えず。しばらくありて、空晴れぬ。」は「極楽記」にない。「宇治」の話は「極楽記」の話では扱わない怪奇な様相や人々の動揺する様子を描くが、このような点に「極楽記」と「宇治」との作品としての性格の違い、及び両作品撰者の関心と興味の違いがあるように思う。

最初に述べたように、静観の奇瑞、験力を示すだけの話ならば「極楽記」の記述の仕方でも充分だったはずである。「宇治」はなぜ「極楽記」そのままの話を掲載せず、余計な部分を付加したような話を掲載したのかというと、後者の話の方がより怪奇性が強いからである。静観の験力を主題とする話をとり上げながら、より怪奇性の強い話を選んだことは、住生伝や靈験記を書く立場からすると不純であるが、より興味本位、趣味本位であり、そのような点に撰者の関心があったわけである。このことは「宇治」の表題になぜ「物語」と付したのかという問題とも関連する。

これまで「極楽記」と「宇治」とに重複する話のような二書間に掲載されている同・類話の研究というと、とかく伝承関係に重きを置いて、性格や扱い方の違いにまでは目が行きとどかなかった傾向がある。伝承関係を明らかにすることも大切ではあるが、決定的なことはなかなかわからない。ここではこの問題はひとまず置いて、内容の対比や検討から性格や扱い方の違い、特色を考える。

二、

増賀上人奇行の話

「宇治拾遺物語」の仏法説話

このことは増賀上人が三条の宮の出家の時に戒師として招かれた第一四三（巻十二第七）「増賀上人三条宮に参り振舞ひの事」についても同様に言うことができる。この話は「今昔物語集」巻十九第十八「三条大皇太后宮出家語」に同話がある。「宇治」が増賀に焦点をあわせるのに対し、「今昔」は三条大皇太后宮に焦点をしばる。このような相違点はあるにしてもこの話の特色は増賀が権威に対してへつらわず奇行を振舞うことである。この点は両者共通する。即ち「宇治」によれば増賀は三条の宮に戒を授け終るや、「増賀をしもあながちに召すは、何事ぞ。心得られ候はず。もしきたなき物を大なりとときこしめしたるか。人のよりは大きに候へども、今は練絹のやうに、くたくたと成りたるものを。」と言って、宮や同席の殿上人、女房達を驚かす。宮が増賀を召したのは増賀の一物が大きいと知って興味をもったからだろうというわけである。次に退出する時、簀子に坐りこんで尻をまくり、水のような下痢を排泄する（出でぎまに、西対の簀子について、しりをかかへて、はんぎふのくちより水をいだしやうに、ひりちらす。音高くひる事限りなし。御前まで聞こゆ。わかき殿上人、わらひのしることおびたし。）。説話集以外のジャンルの作品の場合、排泄物や血、性交、性器等の人間にとって恥部に関する描写や記述をこまごまと書くことは普通避け、扱うことは少ない。例えば平家物語にしても合戦の場合で、ドクドクと流れる血を記述することは極めて少ない。説話集撰者は恥部を扱った話を直視し、採用する。

それにしても増賀賞賛を目的とするだけならば、なぜこれほどまでに細かく奇行、物狂いの場面を記述する必要があったのであろう

か。この疑問に対して私は二つの解答を準備している。その一つは、この話はずでに平林盛得氏（「増賀聖奇行説話の検討」国語と国文学、昭和三十八年十月）によつて指摘されているように事実とは相違する。小右記長徳三年（九九七）三月二十日条に「余參皇
后宮、昨日西刻御出家、預其事者大僧都覺慶、大僧都觀修、阿闍梨慶祚、阿闍梨証空等也。」とあるように、大后宮出家の時に増賀は出席してはいない。このことから考えると、この話は名聞利養を否定する後の聖人達が彼等の理想像を増賀に求めるのみならず、大后宮出家の事実を敷衍、誇張してこのような話に作り上げたのであろう。

解答の第二は、増賀奇行話は大日本法華経験記巻下第八十二、続本朝往生伝第十二、発心集巻一第五等にあるが、これらの諸書では「冷泉の先皇請じて護持僧となすに、口に狂言を唱へ、身に狂事を作して、更にもて出で去りぬ。国母の女院敬ひ請じて師となすに、女房の中にして、禁忌の龜言を発して、然もまた罷り出でぬ。」（法華験記）、「其の後、貴き聞こえありて、時の後の宮の戒師に召しければ、なまじひに参りて、南殿の高欄のきはに寄りて、さまざまに見苦しき事どもを言ひかけて、空しく出でぬ。」（発心集）等と、ごくあっさり記すにとどまる。「宇治」の話では逐一こまかく記すが、そのわけの二つ目は話そのものに対する撰者の興味、いわゆる「物語」に対する興味があつたとみてよいのではなからうか（この点は「今昔」も同じである）。このように考えるとこの話は後人による虚伝であり、露骨できたない記述も創作であろうが、この部分に撰者や平安後期から中世にかけての聖人達の意図や意識が反映し

ているわけであつて、我々もこの記述を無視し、この記述から顔をそむけるわけにはいかない。

増賀上人の話についてはいささか横道にそれた感があるが、本文における私の本意は、静観僧正と増賀上人の二話をとり上げるこゝによつて往生伝、験記等の諸書と「宇治」での扱い方が異なつており、験力、奇瑞話や上人賞賛話とすると逸脱する面があるが、かゝつてそこに「宇治」の物語としての特色があることを述べたわけである。ただし「宇治」は右のような特色のある話だけを掲載しているとは限らない。例えば第七十三（巻五第四）「範久阿闍梨西方を後にせぬ事」―叡山楞嚴院の住僧範久は平常往生を願つていたために西方を後ろにしなかつたという、普通人にはでき得ない行動を記した話―は「続本朝往生伝」の同話と表現の細部にいたるまで一致する。両書の話を対比すると左のようになる。

「宇治」

是も今はむかし、範久阿闍梨と云ふ僧有りけり。山の楞嚴院にすみけり。ひとへに極楽をねがふ。行住座臥、西方をうしろにせず。つばきをはき、大小便、西にむかはず。いり日をせなかに負はず。西坂より山へのぼるときは、身をそばだてて歩む。つねにいはいく、「うゑ木の倒るる事、かならずかたぶくかたにあり。心を西方にか

「続本朝往生伝」

阿闍梨範久は、延暦寺楞嚴院に住し、一生極楽を慕へり。行住座臥、西方を背かず、唾を吐き便利するに、西方に向かず。いまだ善より夕陽をもて背に負はず。山に登るの時は、身を側だてて行く。常に稱ひて曰く、樹の倒るるや、必ず傾く方にあり。心を西方に懸けたれば、蓋ぞ素意を遂げざら

けんに、なんぞ心ざしをとげざらん。臨終正念うたがはず」となむいひける。 生疑ひなし。

往生伝にいととか。

この話の場合、「宇治」は「続本朝往生伝」の同話と比べると、大幅に相違する面や敷衍の部分はない。ただし往生伝が一般に掲載している話の場合のように往生するところまでは記さない。このことからすると「宇治」撰者は、主人公範久が往生したということよりも常人とはかけ離れた徹底した真摯さ、及びそのような人物に興味をひかれたのではないかと思われる。

三、

「宇治」の様々な性格

右にとり上げた三話からだけでも「宇治」の仏法話は様々な面、性格をもっていることがわかる。即ち先行の往生伝、法華験記類と比べると大幅に敷衍する話があり、一方表現やこまかな描写、記述までほとんど相違のない話がある。また本来の仏法話の意図した現報、靈験、往生話と違った怪奇性、奇行を主にした話がある。撰者はこれらの様々な話に対して興味を抱いている。これらの中には往生伝や他の仏教説話集に入れてよい話があるが、他方このような他書からはみだした部分とり上げた話がある。そこに他書と違った「宇治」の大きな一特色がある。

「宇治」の仏法話の特色の一つは往生話の少ないことである(第五十五「薬師寺別当の事」、五十八「東北院菩提講の聖の事」、七十

「宇治拾遺物語」の仏法説話

三「範久阿蘭梨西方を後にせぬ事」、一九四「仁戒上人往生の事」等)。これらの話はどれも公式的な往生話ではなく、詳細な説明は省略するが、往生以外の要素が濃く出ていたり、右に述べたような物語性に対する興味が見られる。一方比較的多いのは地藏菩薩関係の話(第十六「尼地藏見奉る事」、四十四「多田新発意郎等の事」、四十五「因幡の国の別当地蔵作りさす事」、七十一「四宮原地蔵の事」、八十二「山の横川の賀能地藏の事」、八十三「広貴炎魔王へ召さるる事」と観音菩薩関係の話(第六十「進命婦清水寺へ参る事」、八十六「清水寺に二千度参りすぐ六に打ち入るる事」、八十七「観音蛇と化す事」、八十八「賀茂より御幣紙米等給ふ事」、八十九「信濃国筑摩の湯に観音沐浴の事」、九十一「僧伽多羅利国に行く事」、九十五「檢非違使忠明の事」、九十六「長谷寺参籠の男利生にあづかる事」、一〇七「宝志和尚影の事」、一〇八「越前敦賀の女、観音たすけ給ふ事」、一三一「清水寺御帳給はる女の事」、一七九「新羅国后金の楊の事」等。なお清水寺、長谷寺関係話を含めた。また他書に同話のある話があるが、それらの指摘は省略した。である。地藏話で多いのは地藏に冥土や地獄から助け出されてこの世に帰る話(四十四、四十五、八十二、八十三)であり、観音話で多いのは観音の靈験によつて難を逃れる話(八十七、九十一、一七九)、及び貧しさから逃れて幸福を得る話(八十八、九十六、一〇八、一三一)である。地藏話と観音話の多いことは平安時代中期以後から中世にかけての時代の影響であるろうが、特に観音話には現実的傾向が強い。また第八十三話の広貴地獄めぐりの話は「日本靈異記」巻下第九「閻羅王の奇しき表を示し、人に勸めて善を

修せしめし縁」に類話があるが、「宇治」は「日本靈異記」のような現報善惡という因果観は薄い。むしろ現実生きてゐるなまの人間に對する興味が強い。

右の話に關連して横道に入るが「宇治」が因果観の薄いことを第六十三（巻四第十一）「後朱雀院丈六の仏奉」作給ふ事」を例に上げて述べる。この話は、後朱雀院が重病を患つた時、夢に現れた御堂入道道長の示唆によつて丈六仏を造り、叡山護仏院に安置した話である。（「古事談」巻五に同話がある）。「靈異記」ならば丈六仏の靈驗によつて利益があるはずだが、この話は何の奇蹟も起こらない。この点に「靈異記」との扱い方の違いがある。

四、

僧を主要登場人物にした話

ここで仏法話の中でも僧を主要人物にした話に的をしぼつて往生伝類と違つた「宇治」の特色を考える。往生伝や靈驗記、あるいは他の仏教説話集に入れてよいような高德の僧の効驗や上人の行業をたたえた話が「宇治」にある。例えば前述第七十三の範久の話は「統本朝往生伝」と扱い方に違いはあるが、ともかく「宇治」とほぼ同文の話である。これ以外に1、第九（巻一第九）「宇治殿倒れさせ給ひて実相房僧正験者に召さるる事」は、宇治殿藤原頼通が倒れた時、心着僧正を召しにやると僧正が来る前に護法が来て病氣を追い払つた話である。この話は富家語、古事談にもほぼ同文の型で入るが、僧正が験者としてすぐれていたことを語る話として他の仏教説話集に入れることができる。また話末に「心着僧正いみじかり

ぬること。」という評がある。この評は古事談にも「心着イミツカリケル験者也。」と記しているが、この評から僧正讚美の話として扱うことができる。2、第一四二（巻十二第六）「空也上人の臂觀音院僧正祈り直す事」は、空也上人の曲つ左臂を余慶僧正が加持して直した話で、余慶のすぐれた法力が主題となっている。話末に「ありがたかりけることなり」と評する。同話が「打聞集」「撰集抄」巻八にある通り、仏教説話集に入れてよい。3、第一九四（巻十五第九）「仁戒上人往生の事」は、山階寺僧仁戒上人が道心を発して寺から出、往生するまでの行業を記した話である。類話は「統本朝往生伝」「古事談」巻三にある。「宇治」の話と類話と對比すると「宇治」の方が記述がこまかく、人物もいきている。ただし話の内容、主題をみると他の仏教説話集に入れてよい。

右の四例は高僧、あるいは上人讚美の話として仏教關係の諸書に入れてよい。「宇治」が右のような話だけを集めているならば、「宇治」は他の仏教書、あるいは仏教説話集と変るところはないであろう。ところが僧を主要人物とする話でありながら公式的な仏法説話からはみ出す話がある。この傾向の話はかなり多く、三十例前後になる。例えば左のような場合である。

a、第一三九（巻十二第三）「慈恵僧正受戒の日延引の事」は、慈恵僧正良源が受戒を行なう日を急に延期した。すると未の時に南門が倒れた話である。この話は良源の凡人には見通せぬ神通力を讚美した話で、仏法説話の範疇に入れてよい。なお同話は「打聞集」にある。一方同じ良源の話が第六十九（巻四第十七）「慈恵僧正戒壇つきたる事」にある。この話は郡司に對して戒壇を築いてもらう

ことを賭物にして、一間の距離から何度もいり大豆を投げさせて良源が箸で受けとめた話である。この話は戒壇を築くという仏教に關連ある話であるし、同話は「古事談」卷三にある。広くみれば良源の超人性をたたえた話であるが、良源の特殊技能に対して興味をもった話ともこれ、前話と違い公式的な仏教話から幾らか離れる。このような話をとり入れているので「宇治」が公式的な仏教説話集にとどまらないわけである。

b、第七(卷一第七)「龍門の聖鹿にかはらんとする事」は、龍門の聖が男の鹿狩を止めさせるために鹿に代って矢の的になろうとした。聖が鹿の皮をかぶって伏しているのを男が気がついてわけを聞くと、聖は涙を流して「私が殺されればお前が少しは鹿狩を止めるだろうと思つてだ。」と言つた。男は泣いてその場で出家した話である。仏法説話では仏菩薩が僧や信者に代つて矢や刀を受ける場合がある。この話もその延長線上にある話であろうが、靈驗話や奇蹟の話と違つてわが身を捨てて男の罪を救い鹿の命も助けるという広い人間愛の話であり、また情を強調している点人情話でもある。なお「古事談」卷三にも類話はあるが、情が出ていない。

c、第三十七(卷三第五)「鳥羽僧正与国俊たはぶれの事」は、大僧正覚猷が甥の陸奥前司国俊を長時間待たせたり無断で車を借用したので、国俊は碁盤を裏返しにして湯舟に置いた。覚猷はいつもの癖で湯舟に飛び込んでお向けに寝ると、碁盤の足に尻骨をぶつけて気絶した話である。この話は覚猷の気妙な癖と平常の生活、性格の裏面を暴露した話で、高僧の話ではあるが、靈驗話、讚美話等の仏法話とは無關係である。

「宇治拾遺物語」の仏法説話

d、第一三三(卷十一第九)「空入水したる僧の事」は、ある聖が桂川で入水往生を志しはしたが、見せかけだけで、ようやく舟から投身したが逃げ去つた話。後に聖が悪びれもしないで手紙の上書に「前の入水の上人」と書いているので、話としては明るい感じを残すものの、人々に尊敬され、布施をもらうがために入水往生を企てる場合があつたという聖の一面を見せる。欲望まる出しの生身の人間臭い話として価値はあるが、往生礼讃の仏法説話の意図とは反する話である。

e、高僧、上人とは到底言い難いが、「兵だつる僧」くうすけくも一応は僧の仲間の人としてとり上げることができる。この話(第一〇九(卷九第四)「くうすけが仏供養の事」)は、くうすけが仏を造つて供養したが仏師や講師へのお礼や布施を見せただけで出さなかつた話で、くうすけを徹底したペテン師、詐欺師として扱う。一方の仏師、講師も欲深な人物として描く。主役であるくうすけも脇役の仏師、講師も他の仏教説話集であるならば、施物の横領と欲深という点で悪報を受けるはずであるが、「宇治」では仏罰を受けない。話末の評でも「かかりともすこしの功德は得てんや。いかがあるべからん。」とするように、くうすけを悪徳の僧としては扱わない。むしろこのような思いがけない話を楽しんでいるかのようである。

右の例から明らかなように、登場人物に関する話をみると「宇治」には高僧、上人讚美の話がある。これらの話は仏法説話として「宇治」以外の往生伝、靈驗記、仏教説話集に入れてもさしつかえない。これらの話が圧倒的に多ければ「宇治」もこれらの諸書とさ

程距離の隔たりのある作品ではない。「宇治」をこれまで説話集の中でも仏教説話集の範疇には入れず、一般説話集、あるいは世俗説話集の中に入れて来た。その一つは「宇治」の中に仏教とは無関係の俗人や異類、動物の話が多いことによるが、それだけでなく仏教に関する話についても往生、靈驗、因果等という以外のテーマ、あるいは別の要素の強い話がむしろ多いからである。これらの話の多いところに「宇治」の大きな一性格がある。ここで僧を主要人物にした話のうち、まず主な高僧・上人讚美話を掲げると、第九(巻一第九)「宇治殿倒れさせ給ひて実相房僧正驗者に召さるる事」、第二十(巻二第二)「静観僧正祈雨法験の事」、第五十五(巻四第三)「葉師寺別当の事」、第六十五(巻四第十三)「智海法印禪人法談の事」、第七十三(巻五第四)「範久阿闍梨西方を後にせぬ事」、第一〇七(巻九治二)「宝志和尚影の事」、第一三六(巻十一第二二)「出家功德の事」、第一三七(巻十二第二)「達磨天竺僧の行ひ見る事」、第一三八(巻十二第二)「提婆菩薩龍樹菩薩の許に参る事」、第一三九(巻十二第三)「慈恵僧正受戒の日延引の事」、第一四〇(巻十二第四)「内記上人法師陰陽師紙冠を破る事」、第一四一(巻十二第五)「持経者叡実効験の事」、第一四二(巻十二第六)「空也上人の臂観音院僧正祈り直す事」、第一四三(巻十二第七)「増賀上人三条宮に参り振舞の事」、第一四四(巻十二第八)「聖宝僧正一条大路わたる事」、第一七二(巻十三第十二)「寂照上人飛鉢事」、第一九四(巻十五第九)「仁戒上人往生の事」等。

これらの話でも、前述したように往生伝等では避けて記述しない場面をことさら直視して詳述する場合があります、話末に「心着僧正いみ

じかりぬること」(第九)、「不思議の事也」(第二十一)、「それにつけても、貴きおぼえはいよ／＼増りけり。」(第一四三)と評してはいるが、はたして高僧、上人讚美の意図だけでこれらの話を上り上げているのか疑問の場合がある。

次に後者の主な話を、話の特色から分類すると左のようになる。

ア、不浄法師の話―第一(巻一第一)「道命於三和泉式部許一読經し五条道祖神聴聞の事」、第二(巻一第二)「丹波国篠村平茸生る事」イ、狂惑の法師・えせ聖の話―第五(巻一第五)「随求陀羅尼籠額法師の事」、第六(巻一第六)「中納言師時法師の玉くき検知の事」、第二三(巻十一第九)「空入水したる僧の事」、第一四五(巻十二第九)「穀断聖露頭の話」

ウ、人情を強調した話―第七(巻一第七)「龍門の聖鹿にかはらんとする事」

エ、性的興味の話―第十一(巻一第十一)「源大納言雅俊一生不犯の金打たせたる事」、第七十八(巻五第九)「御室戸僧正の事、一乗寺僧正の事」(前掲の第一、五、六も関係がある)

オ、児の心理を扱った話―第十二(巻一第十二)「児のかいもちするに空寝したる事」、第十三(巻一第十三)「田舎の児桜の散るをみて泣く事」

カ、怪異性のある話―第二十一(巻二第三)「同(静観)僧正大嶽の岩祈り失ふ事」、第二十二(巻二第四)「金峯山薄打の事」、第五十七(巻四第五)「石橋の下の蛇の事」

キ、身体に異常のある話―第二十五(巻二第七)「鼻長き僧の事」、第一三〇(巻十一第六)「藏人得業痕沢の池の龍の事」(前

掲の第七十八も入る)

ク、過度のいたずらの話―第三十七(卷三第五)「鳥羽僧正与国俊(たはぶれの事)」、第七十六(卷五第七)「仮名曆あつらへたる事」(前掲の第一三〇も入る)

ケ、老僧の恋の話―第六十(卷四第八)「進命婦清水寺へ参る事」

コ、死僧と問答した話―第六十八(卷四第十六)「了延に実因自湖水中二法文の事」

サ、特殊技能の話―第六十九(卷四第十七)「慈惠僧正戒壇つきたる事」

シ、魚を盗み食いた僧の話―第七十九(卷五第十)「或僧人の許にて水魚ぬすみ食ひたる事」

ス、無智の聖の話―第一〇四(卷八第六)「獵師ほとけを射る事」、第一六九(卷十三第九)「念仏僧魔往生の事」

セ、欲の深い僧の話―第一〇九(卷九第四)「くうすけが仏供養の事」

ソ、前世の父親が鯨になったのを食べた僧の話―第一六八(卷十三第八)「出雪寺別当、父の鯨になりたるを知りながら殺して食ふ事」

五、

聖・上人の話

前述したように僧を主要人物とした話のうち高僧・上人を讚美した話がある。一方公式的な仏法説話から隔たった距離にある話や他の仏教説話集・往生伝類に掲載するには遠慮される話がある。後者の話を撰者が平然ととり上げている所に「宇治」の大きな特色があ

「宇治拾遺物語」の仏法説話

る。

ここで僧のうち特に聖・上人と称されている人物をとり上げると、まず比較的讚美されている人物には、龍門の聖(第七)、清徳聖(第十九)、東比院菩提講を始めた聖(第五十八)、もうれん聖(第一〇一)、宝志和尚という聖(第一〇七)、日藏上人(第二三四)、天竺の跏趺を打つ上人(第一三七)、龍樹菩薩(第一三八)、内記上人寂心(第一四〇)、敎実持経者(第一四一)、空也上人(第一四二)、増賀上人(第一四三)、貴き某聖(第一四八)、寂昭上人(第一七二)、優婆塞多(第一七四)、極楽寺の僧(第一九一)、仁戒上人(第一九四)等多数登場する。これらの人物は比較的讚美される。中には前述のように往生伝類に同話をとり上げている場合もあるが、増賀のように「宇治」で詳述している部分を他の仏教説話集で省略する場合がある。また情のある話(第七―前記では公式的な話でないことから讚美話に入れていない)、ほのぼのとした暖かみのある話(第一〇一)等があつて、これらの中にも公式的な靈響、往生話とはいえない場合がある。

一方、中納言師時に玉くきを検知された聖(第六)、愛宕山の無智の聖(第一〇四)、空入水したえせ上人(第一三三)、殺断ちが露顯した聖(第一四五)、天狗にだまされた伊吹山の聖(第一六九)、慢心をおこした清瀧川の聖(第一七三)は「今昔物語集」巻二十等にとり上げられている話もあるが(第一〇四、一四五、一六九、一七三)、他の往生伝等にはほとんどとり上げられていない。この後者の人物は欲望も名譽心もある、平凡な生身の人間であり、玉くきを検知された聖、空入水の上人、殺断ちの聖には、聖としての体面

を必死に守りながらこの世を生きていかなければならない姿を見る、ことができる。これらの話には語末に「狂惑の法師にてありける。」(第六)、「聖なれど、無智なれば、かやうにばかされける也。」(第一〇四)等と評がある。この評が撰者自身の付した評かどうかはわからないし、第一〇四には「今昔」巻二十所収の同話にも同様の評がある。「宇治」はこの評以上に激しく非難することはしない。序文に「：様々やうくなり。世の人、是を興じ見る。」とあるように様々の傾向の話の一つとして興味を持って記したとみる方がよい。ただし撰者は興じ見たのであろうが、このような人物の話をとり上げたところに他の作品にない「宇治」の特色があるわけである。持経者・往生者の行業の話を掲載する意図だけで編纂したならば右の話はかなりはずされていたはずである。

結び、

これまで「宇治」の面白さ、特色、性格についていろいろと論じられて来た。しかしその本質がどこにあるのか、何であるのか、つかみにくいのが現状である。往生伝、靈驗記、説話集の場合、編集意図は大体はつきりしており、話もそのような意図に沿ったものを掲載する場名が多い。一方「宇治」では序文をみても意図がはつきり出て来ない。むしろ興味本位で話を集めたかの感がある。ところがそのためにかえって他の作品でははずした話を掲載することができ、それらの話に生身の人間が息づき、活躍する。また往生伝に同話があっても往生伝で見過ごした部分を「宇治」が記述しており、その部分に話の面白さ、特色、性格がひそんでいる場合がある。

「宇治」には昔話、和歌説話、笑話等様々な傾向の話があるが、それらの中で右の問題を私は仏法説話に的をしぼって述べた次第である。

注、本論文で使用した本文は以下の通りである。日本古典文学大系——宇治拾遺物語、今昔物語集。日本思想大系——日本往生極楽記、大日本法華経験記、続本朝往生伝。日本古典集成——発心集。国史大系——古事談。

なお個々の話の場合は仏法説話、作品は仏教説話集として区別したが、便宜的なわけ方で格別意味があるわけではない。